

望東尼『みのとしうまのとし』翻刻と解題：『向陵集』との関連において（下）

進藤，康子
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/8954>

出版情報：文献探求. 44, pp.33–60, 2006-03-31. 文献探求の会
バージョン：
権利関係：

望東尼『みのとしうまのとし』翻刻と解題

『向陵集』との関連において（下）

進藤康子

前号に引き続い、福岡市博物館蔵の野村望東尼和歌資料の翻刻・解題をする。

前回は、望東尼の『向陵集』の歌稿の一部であろうと推測される資料として、嘉永四年ごろの『歌集 言道・望東・貞能・宇逸』（以下『歌集』）を翻刻・考査したが、今回は、同じく福岡市博物館の望東尼資料『みのとしうまのとし』（請求番号 野村望東尼遺品030）を取り上げ、翻刻および紹介し、加えて本資料と『向陵集』との関連において新たに考察していくと思う。

一 資料的価値について

『向陵集』は、天保三年から慶応元年に及ぶ、望東尼二十七歳から六十歳にかけての三十四年間の長きにわたって収録された約千九百首の歌集である。それに対して『みのとしうまのとし』は、安政三年から安政五年にかけて筆録されたもので、歌数三百六十五首（註1）、そのうち『向陵集』と重なる歌が約百九十首程あり、『歌集』同様『みのとしうまのとし』も『向陵集』の歌稿の一部であると思われる。（註2）

この歌稿には、師の大隈言道の朱点および批言があり、きめ細やかな添削の跡がみられる。安政三～四年の言道は、今泉の自宅ささのやでの指導はもちろんのこと、久留米の藩士拓植仰厚（七草園の翁、106番歌参照）や、飯塚の宝月楼古川直道、納祖神社神官青柳直雄、造り酒屋の小林重治などを中心とする地方教授所の歌会指導にも全力をあげて取り組んでいた時期である。（註3）言道門下全盛期の華やぎが伺える前半部分と、後半は、『草径集』を出版するために上坂する言道に対して、弟子たちの名残惜しい様子が紙幅を割き、その後の「うまのとし」は、言道不在の歌会をささやかに持続する門下生の動向などが記されている。加えて、『向陵集』においての年号の間違いや、『向陵集』では削除されたであろう部分や、逆に加筆されたであろう箇所などをも、本資料によつて新たに知ることができる。

本資料の見返しには、「鋸谷居野村奮藏書記」の蔵書印がある。この奮（あらた）は、夫貞貴と先妻との間にできた長男貞則の子で、幼名野村才丸、後に貞和と名乗つた。天保二年生まれ、明治二年没。嘉永四年、十歳にして馬廻組で三百三十石を領すが、「安政四年のとし」に詠まれた10番歌の詞書「貞和かとしこもと子にいたつきありて道ゆくさまなどれいならさりければ」としおくるにしたかひとにいつるこ

となとはちらひなれは」からわかる様に、ながらく神経痛に悩まされ家に籠もりがちとなり、病気の進行で手足が不自由となつてからは、

弟の貞省に家督を譲り、後に「奮」と称したその人の印である。血のつながりはなくとも孫にあたる者の旧蔵ということになり、そのまま野村家から出ることなく保存されていたであろう貴重な望東尼自筆の新資料である。

二 歌稿『みのとしうまのとし』と『向陵集』

「みのとしうまのとし」の表題は望東尼による直書きで、当時の年号をそのまま歌稿の名としている。みのとしは安政四年、うまのとしは安政五年にあたるが、加えて見返しの片隅に、「安政三年十二月うたあはせに」として三首の書き付けが残る。

内容についてみていくと、『みのとしうまのとし』中の詞書は、歌の詠まれた状況をできるだけ残しておこうとしている。合わせて、その時の歌の会合に出された題も記録するという筆録の姿勢が見受けられる。例えば、「三日に翁のきたられる時 題梅」(8)（以下括弧内は歌番号）では、言道（翁）が平尾の望東尼の自宅「向陵」に来た時の歌会のこと、「正月十一日馴花亭にかれこれつとひして 題梅」(9)は、馴花亭より薬院の人木つる子の自宅での歌会であることがわかるが、いずれも『向陵集』では削除されていて、場所も日時も知り得ない。「う月十四日はかりにおきなの遠きところよりかへりてきたられるにさま／＼の題をいたしてよみける中に 蝶」(100)も、『向陵集』では、題「群蝶」だけで、細やかな状況が削除されている。「ま」ともか半日五十首うたよみける時にましりて 題山」(4)

1) の孫との歌の稽古や、「二月二十五日杉のやにして 題川花」(2) なども同様である。

言道が大阪に向けて福岡を旅立つ時の弟子たちの見送りの場面では、124～129番歌の詞書き部分でより詳しい状況を知ることができる。特に、「八月十五日に言道翁のみやこにいてたゞんとてこゝにきたられる時」の歌、「たえかたきおもひをたちてわかるなりきみかこゝろのたひなれはこそ」(125)は、『向陵集』でやはり削除されており、これまで陽のあたることがなかつた歌であるが、言道と別れる際の望東尼の断腸の思いが切々と伝わつてくるようで、なんとも捨てがたい歌である。

また、「さてかの日になりければ、ふたまたせといふところまでおくりにとて、いまいつみよりかれこれつらたちて行道にて、田中なにかしかいへに翁をゐて行ければ、したかひ行もあり、おのれ二人三人さきたちて、ちよのまつはらのうらてなる松陰に行てまちむたるほど、まさににかいつけたりける」(127)から、出立の日に弟子たちは、言道の居所の今泉から一緒に連れ立つて行き、送つて行ける所まで、せめて二股瀬までは師を見送ろうと、ぞろぞろ後ろから着いて行つたことがわかる。道すがら言道があちらこちらの知人に挨拶に寄る度に、じつと表で待つたり、またあるいは、少し先に行つて砂浜で待機する。その時に、松原の砂に戯れに歌を書いたのが「みやこより君かへり来てまつはらにかくてありなはいかにたのしき」(127)である。

続いて「いとおそらく來たられるを、かしこにおくりゆく道にて、けふはこのさとにやとりて、人々と月見んなといはれければ、たれも／＼さもといひて、かしこのはらにてさけなどとふへけるうち、あまりにはしたなきやとりなれば、いまよりさゝくりのさとまでゆき給

へなとそゝのかしてしひてわかるゝとて」「きみとわかうみ山とほくへたつとも月はかたみに見るへかりけり」(128)においても、道中で月見の酒宴などをしたりして、あまりに大騒ぎとなり見苦しいので、名残惜しいが、ここでわかれ、言道には八木山峠の麓の篠栗あたりに宿をとるよう勧めている。旅立つ言道とどうしても別れ難い望東尼たちの気持ちを「月はかたみ」としたこの「きみとわか」の歌を見ることができる。

言道はすぐに大坂に向けて出発したわけではなく、篠栗から飯塚に回った。飯塚には、小林重治、青柳直雄、古川直道をはじめとして多くの弟子がいた。特に、小林重治は、後に言道が大阪で『草径集』を上板する際の最大の出资者でもある。どうしても、飯塚の大変なパートロン達に大坂出立の挨拶をしておかなければならなかつた。

それに対して望東尼は、いつたいつまで飯塚に滞在するのかとやきもきしている。その微妙な心境は、「はつかはかりまでいひつかのさとにありて、舟てせんとていてたゞれけるに、そのころ風いとはけしう吹けるにかしこに文をつかはすとてかいつけゝる」の詞書と、「こよひ吹く野分をきみかおしはかり舟ていそかて待しうれしさ」(129)の歌に詠み込まれた。飯塚から芦屋へ行き、芦屋から船出を待つ間に、大風が吹いて出発できないいるのを聞き及び、半ば心配しつつも、まだ近くに居る言道にうれしいやらで、早速、文に歌を付けて書き送つたのだった。

その後「十月すゑつかたまでもあしやのさとに翁のやとられけるよしきゝていひつかはしける」の詞書から、十月の末になつても、まだ難波に行つていないこと、少なからず苛立ちさえも感じ、「なにはちにゆくともゆかぬかりふしはよしやあしやとおもひこそやれ」(14

1)と詠み送つた。八月十五日に福岡の今泉を發つてることを考えると、随分長らく芦屋にも滯在していることとなる。事あるごとに揺れ動く望東尼の多感な心情と師への思いを垣間見る。しかしながら、望東尼上坂以後、彼女の思想の変化とともに、言道へのまめやかな心情は確実に変わつていつた。

ところで、本資料によつて『向陵集』中の言道上坂の年号の記載に間違いがあることがわかつた。『向陵集』を編纂する段階で、歌稿を参考にしながらもまた新たに推敲していったのだろうが、言道の大坂出立は「安政四年のとし」(4)「八月十五日に言道翁のみやこにいてたゞんとてこゝにきたられる時にさま／＼ものかたりのつひてに」(124)であるのに、『向陵集』では「安政三年巳午のとし八月十五日に大隈言道のうし都にのほらんとにはかにおもひたゞれければとゞむへきことにもあらず。わりなくわかれすとて、おなしく六日にわかいほりにむかひけるとき」と認められ、「安政四年」を「安政三年」としている。これは、本資料の見返しに、「安政三年十二月 うたはせに」と数行の書き付けがあることから、安政三年のできだとしてしまつたのではないだろうか。前後の歌の関連から見ても、なんらかの書写ミスであろうと思われる。

また、「ゆきまとふかた山かけのわかれみち」(31)から、「ゆきまとふかた山かけのわかれみち」『向陵集』を訂する」とが、「せくこともあきはなかりしまきのとを」(334)から、「さすこともあきはなかりしまきのとを」『向陵集』を同じく訂することができる。

さて、言道上坂後の和歌指導の様子を知る箇所として次のような例がある。

言道

わかれつゝたひゆく道のくれゆけはおもひやるやとおもひやりつゝ
以上

二百六首（223）

とある如く、言道不在でも、和歌訓練のため、二百首程度ずつ何度かに分けて言道に送付し、通信教育の様な形で添削指導を受け、『向陵集』の完成に向けて準備していったと想定される。『向陵集』ではやはりこの部分も採られておらず、本資料の方から補つていくと編纂過程が窺い知れる。

また、言道上坂以後、言道不在の歌壇を細々と支えた望東尼の身近な人々の名が、その折々に登場する。太宰府の陶山一貫（巻）、緒方洪庵の医学の弟子で言道の歌友武谷祐之、谷川幹辰、前田知良、四宮素行など、この時期の歌友の動向も詞書から知ることができる。

加えて、言道に望東尼が和歌の下の句を二通り提示し、選択及び添削を乞う場での、香川景樹に関する文言「かけきかうたに似たるものから……」（135）なども注目される。言道は歌論で「香川景樹が集桂園一枝 己れ八九年前書肆にてふと見しに その名に目がつかで凡人の集ならめとあなづりたるを 今よく熟読するに 古人に劣れること莫大なれど 今人にはまれる事百倍なり」「景樹などは古今集などをかく難き事に言へり。田舎人は古今集にも易く近づきたる面もちなり。さる事あるべからず」（『ひとりごち』）と述べており、また、「景樹のいへる 歌は思慮を加ふべきものならねば 古に似せんとする暇あらんや わがこれを似せたらんはやがて飾れる偽のみ」（『こぞのちり』）と、かなり景樹を意識している。これらの記述と照らし合わせて、門下歌会指導に於ける言道の歌論の構築と実践といった観点から、今後精査すべきところであろう。

文久元年十一月、望東尼は同門の野坂常興とともに、言道を慕つて大坂へ旅立つ。亡夫の遺稿を言道に添削してもらい、出版したい旨が一貞貴君（夫）もなくならせ給ひしかば忘れ形見の言の葉は、いかで梓にも彫らせてむとのたまひし事もあれば」と『上京日記』にあり、また、『向陵集』に言道の序を約することも一つの目的としていた。それは、師の『草径集』同様に、自らも家集を上木したいという思いがあつてのことではなかつたか。しかしながら亡夫の集も、『向陵集』も幕末の動乱の中で、結局のところ実現し得なかつた。

以上、『みのとしうまのとし』の概略を示したが、今後これらを基礎資料として、更に『向陵集』を精査しつつ、福岡市博物館望東尼資料の皆悉調査を進めていきたい。言道と望東尼の関係は上坂以降微妙に変化していくのだが、しかし、お互い目指す道は分かれようとも、勤皇思想へと突き進む望東尼に對して、程よい距離をおいて見守る師言道の姿をも詳しくみていくればと考える。そして、人々の思いを飲み込んで激しく動く時代のうねりの中、言道歌壇の位置とその動向の解明へと繋げていきたいと思う。

三 翻刻

（一）書誌

書型

縦 十一・八粍

横十六・六粍

横本

外題

墨書外題「みのとしうまのとし」

用紙

楮紙 白色 本文共紙

○ ○ ○ ○ ○

丁数

四七丁

備考

野村望東尼自筆歌稿 大隈言道の朱点、朱批あり。
「鋸谷居野村倉藏書記」の蔵書印が見返しにある。

末尾に覚書きあり。

(二) 凡例

一、福岡市博物館蔵『みのとしうまのとし』を底本とした。

一、和歌に通し番号を付した。

一、『向陵集』(福岡市博物館蔵)と重なる歌は、『みのとしうまのとし』の通し番号と歌に、**3** の如く網掛けで示した。

一、言道の朱点は・で、批言は()で示した。朱の○△印

は原本の通りに写した。

一、原本の表記は、漢字仮名などできるだけ原文のままとしたが漢字の字体は一部現行字体によった。

一、丁うつりは「で示し、表裏をそれぞれオ、ウと表記した。

一、末尾にある見せ消ちの覚え書きおよび歌の書き付け部分等は、翻刻を省略した。

一、破れや見せ消ちで判読できない部分は□□とした。

みのとしうまのとし 「〈表紙〉

安政三年十二月うたあはせに

1 ·はかくれにおもてふせたる山椿さてこそしもにいろもかはらね
2 ·たゞ一枝さきてほとぶるうめの花冬日陰をこゝろみるかも

3 ·みてこゆるみつおとさむき川風にふかれてもとくさけるうめかな
な」〈見返し〉

安政四年のとしのあけかたまたきよりねさめておきいてた
るあけさりければ

4 山のはのあけたつそらを待ちかねていくたひあくるねやのまとの
と

おなしくあかつきはかりに

5 しめなはのおほろ／＼にうつりくるまとよりとしはあけはしむ也

6 けさのまをのとかにせんことしけき冬の日数をとかくすくしつ

7 ·よひとよにひのなかさゝへかはるまで世をのとめてもきたるは
る哉

8 三日に翁のきたられる時 題梅

9 ·山さとのしはのけぶりにむせひつゝひらきかねたるのきのうめ
かな
「(1・オ)

正月十一日馴花亭にかれこれつとひして 題梅

9 ·はるたちて心しつむるひまもなしあまりにうめのさかりいそけ
は

(三) 翻字

- 10 . はることにこゝろはかりは月の瀬のうめのこのまになれつゝそ
ゆく
- 11 . 貞和かとしこるものと子にいたつきありて道ゆくさまなどれ
いならさりければ としおくるにしたかひとにいつること
なとはちらひなれば
- 12 . あさりても心のかたはになかりせはゆみやとる身にはつること
なし
- 13 . うめのはなさかりまたなくはつ春にをさ／＼しくもふるみゆき
かな 「へ1・ウ」
- 14 . さま／＼の題などよみける時みのとしのこよみといふこと
を
- 15 . あわゆきにふりけたれたるはるかすみけさはつもれる山にたな
引 うくひす
- 16 . 見しこともなき山陰のうくひすのすみかに心やらぬはるなし
正月 うたあはせに
- 17 . ともしひをふるとしなからかゝけつゝよふかくはるをまちく
るゝかな
むなり 「へ2・オ」
- 18 . のきちかき梅のした風かをりきてまどの引ともさゝぬよはかな
- 19 . さゝかにのかけふるしたるいとのまにほこゝろひそむるもりかけ
のうめ
- 20 . 山まつもふりうつめくるしらゆきをもれいてゝたつはつかすみ
哉
- 21 . またちらぬ花とは見れとかはなみに心さわかすみなそこのかけ
駢花亭にして 題華
- 22 . すへらきのすぐるかみよはゆきつけていちにうりいつる冬のた
けのこ
- 23 . 立かはるとしのはしめはよの中のうきせのなみもなきまなりけ
り 「へ2・ウ」
- 24 . かれはてしまへの川せもなかれきてつのくむあしのめつらしき
かな
- 25 . あわゆきはふりかゝれともつゆはかりむすひとめたるあをやき
のいと
- 26 . はつはるのなかはすきつるひかすさへ見らてきひしくひけるか
とまつ
- 27 . 山郷はやねのみゆきのとけそめておつるやはるのおとつれとき
山家 (春)
- 28 . おもふことありけるとしのはしめつかた
- 身をわふるこゝろもはるはかすみきてうめ柳にもうつりゆくか

風 「4・ウ」

さゝかに

あさな／＼ぬきとゝめたるさゝかにのちすちのいとやつゆのたまのを

うくひすりけり

はることにかはらぬうさはうくひすをきかぬまにゆくひかすなりけりけり

花さかり

このまよりしのひにかよふ松風のおともゆゝしきはなさかりかな

こま

はるのたをかへしつかれて引人もこまもしつかにかへるゆふく

れくも

さくら花ちりこぬさきにちることをおもひかけたるくものいとかな

落下（下句今少）

（とり見る）

ちるはなをひさのもとまでおくりきてこゝろとるなりはるの山

かせ「5・オ」

またまひしかはるかはるの山風

花早散

老らくのそらおほえかはしらねともいつよりはるのさかりみし

（き）（下ノ句今少）

かし

又

・花のひかすのたらぬこゝちす
暮春

・とゝまらぬはるのゆくへをとし」としたひなれたるこゝちく
せかな
はるのつゆ

・さきかぬるはなにまかひし白露はたはかられてもうれしかりけり
り

（暮春月）

・をとめらかまゆよりほそきありあけの月影はかりのこるはるかな

こま

・わかゝたにせめては吹こさくらはなさておくへくも見えぬ山

風前落花

風「5・ウ」

みしかよ

・いつしかとみしかくなれるはるのよをつかれてねたるあしたに
そする

野橋

・なのはなのかけにかくれしまろき橋しらてをかはをわたりつる

哉

さゝのやの翁のとしことにいひつかのさとにはるをすくされ

ければたよりにいひつかはすとて

・はることに君をとらむかいひつかのさとのさくらはきりもす

てゝん

いかめしき松のふる枝にもゝちとりゆきちかひともとふあさけ

かな

くもりひ

6 0
・きのふよりもおもはしきくもりひのあめとほるゝゆふくれ
のそら」<6・オ>

暮春月

6 1
・まとのとにわかうへるてのかけ見えて老ゆくはるのありあけの
月

うまこか手あしのいたつきとしふれとおこたらさりけれ
はむさしのゆにものしける時秋の人あひやとりてあま
たゝひゆをくみかけるとねもころにものしければものか
たりのつひにて

6 2
・老らくのこゝろのやみのくらさまできみのくみしるいでゆなる
哉

かしこの川へのほたるなど見てありきける夕くれに二日
市といふところのものゆくを見しれるものゝやうにおぼ
えてものいひければよろこひていろ／＼のくわしやうの
ものをかのやとりにおこせけるに」<6・ウ>

6 3
さつきやみくらきよのまのほたるより人のまことそさやに見え
ける

人々さけなとゝふへける時いまやうをうたひておのれに
つくれとせちにいひければ

いてゆのきとのかりねにはしるもしらぬもへたでなくこゝろの
あかもさるはかり身をもこゝろもあらはせり
日ことにのほるたかとのよる／＼めくるさかつきこゝろへたて
ぬまとゐにはなきもましへよほとゝきす

6 5

6 4

6 3

大鳥居の式生の君ゆに物せられるけるをしらでいつものこ
とく人々ゆきてけるにかの人さきにいりてありければす
へなくてしらぬさまにしてかへりてよみつかはしける
・きみかいるいてゆとしらでかしこくも身をあらはしてま見えつ
る哉

6 6

さてかへりてのち日をかへてゆくりなくあひ見しのちは
時わかすおもひいてゆの君かことはかへりことに
・はしたなき身のやさしさもときわかすおもひいてゆとなりにけ
る哉」<7・オ>

う月はじめのつかた野間の山なるふちの花見にかれこれ
ゆきける時

石秀

(こゝら)

6 7
・見るわれさへにまとはれにけり

(ふち)

6 8
・山なみのかゝるこたちの中にきて

同

もと

7 0
はるのとまりのふちなみの花

石秀

7 1
なにとなく立さわくめりくればてし
山なしを見て

同

7 2
しる人なしの花さかりかな

」<7・ウ>

もと

73 これぞこのはるのないりとさくものを

おなしく六日陶山翁などともなひて中の川原にあそひける時かしこのゑともかいちらしてそのかたはらになの川をあかぬあまりにうつしても水のけしきはかきもどす

夢にはなを見て

75 • 夏のよのゆめに見えこし桜花春のねふりやさめぬなるらん
76 • 立ちつく川そひ柳しけゝれともりきて水にすめる月影
」〈8・オ〉

三月うたあはせに

77 • おもしろき事も無とは思ひは花見ぬひまのこゝろなりけり
78 ○・谷ふかきこたちかくれの山つはきとりすかりてもたをりつる哉
79 • いけ水のそこにうつれるかけさへもうかふと見えてちるさくら
かな

80 ○・こきませてちり来るさくらもゝの花みわきかたくもなるゆふへ
かな

81 まつかえもおれぬはかりにまとへともまたかすかぬふちの花
ふさ

82 ○・ちりとまるくものを丸のさくら花かそふるまゝにもかすそしら
れぬ
」〈8・ウ〉

83 ○・わかえよりわかえさしてゝいやましにうむはかりなるいと柳か
な

84 ○・花見つゝわかふしきはのつく／＼しねなからにさへつまれつる
哉

四月 そま

85 そま人のまきのこけらのくつまでも見いてゝひろふさとをとめ
とも み山木
(生立もせす)

86 • み山きのこゝろまかせにのふ枝もさまあしけには老たゞすして
いはら
87 山さとのかきねをすてゝわかそてをひかへてかほる花いはらか
な
ある時に

88 • ゆきまとふこゝろのやみは人またにしらへをとはむつてたにも
なし
」〈9・オ〉

89 なはしろは水にまかせてさとひともそまのたきゝをはこぶる
かな
ねこ

90 • くさむらにまろひてくるふからねこは何ゆゑにさはこゝろみた
るゝ
老松

91 • としふれは松もしつくとうちたれてたちのみかたはうとくなり
ゆく
わかたけ

92 • わかたけのこすゑしつかに吹風は心のさわくうきふしもなし
雨中閑窓

ろかな」
しのゝめ

こ

梅実

はれかてにふりいる雨のくもはれてなか／＼ふかきやまのかす
みに

首夏霞

・ほとゝきすなきやまとはむはるくれて中々深きやまのかすみに
いちめ

いちめ

・よの中をわたりかねてかひさきめの野こへ山越ひなかよひして
97

・ひなちまていちめいりきてことたらぬうたなくなれぬみよのゆ
たけさ

雨中蝶

・あめそゝく枝おもけなるこのくれにはさかろくもとふ／＼ちふ
かな

うの花

・うのはなのかきはあらはに見えながらさとかけくらきゆふつく
よかな

「10・オ」

う月十四日はかりにおきなの遠きところよりかへりて
きたられけるにさま／＼の題をいたしてよみける中

に 蝶

・さま／＼におのか心におりきたるてふの羽そてはあやにめつら
し

・かけ見えしまとのこてふはあともなしねやにいるかとあくるそ
のまに

たけのこ

・かきつなるおやはなれてそともなるいはらの中に生るたけの
102

・なれるみもまためてたきをうめの花ちるをかきりの物とおもひ

し 「10・ウ」

・としこになりぬるうめのみのかすをおふしたてゝもさかせて
しかな

うの花

・さきかぬるかきのうの花待かねてふゝめるうへにねむるてふか
105

な

七草園の翁の七十の賀によせてつかはしける

なゝくさの花のゑまひもしられけりきみかなゝそちいはふこと
106

しは

・かきりなき君かそのふのなゝくさはよはひをのへの花にやは
107

らぬ

植木何かしか主人よりろくたまひしといひおこせたり
けるにあふきにかきてつかはしける

・たゆひなくきみにつかふるすなをちはゆくすゑひろくなるはし
めかな

「11・オ」

あらし

・をるはかり夏山あらし吹来になへてみつえとなれるこすゑに
108

なわしろ

・ゆたねたにまたまきあへぬなはしろのみつのにこりにすめる夕
109

月

・かはきしにひかるほたるのかけのみそなかるゝ水のそことにと
111

ほたる

むる

五月二つありけるとしの夏のはしめつかたに

ふたつあるさ月のうちを夏にしてう月をはるとおもひなさはや

ほとゝきす

「とゝきす」
「11・ウ」

いつのまにゆきちかひてかこしかたのそらのあなたになくほ

五月はしめのつかた翁きたられける時題やまなし

はなはみな雨にくたしてやまなしのさきしこすゑもわからなり

にき

山から

いくたびかこのした水に山からのうちはふきては枝わたりする

う月うたあはせのうた

まかひでしかすみなかれて烟のみ立のこりたるうらのしほかま

ゆくへなりぬと見ればくさむらにあらはれいてとふこて

ふかな

・ぶちの花風にみたるともすりにちる時ならてちりもこそそれ

「12・オ」

・おほかたの人のこゝろもひとりたにゆく道見えてかよふちふは

ら

七月朔日のよにゆめのうちによめるうた

うめのはなさけるこすゑはよそにしてうれし山枝にかゝるつき

かけ

八月いつかこなるものとまにめあはすへき人のみま

かりて二十五年にあたる時かのはのもとにいつか

はすとて

・女郎花はなにも花のさきそひてあらましかばとおもふあきかな

あきのはじめつかたに

・のかれんとしひておもふやよの中をのかれぬよりのこゝろなる

らん

・のこりぬし夏をしつめておくつゆをこゝぢょけにもなくむしの

こゑ

八月十五日に言道翁のみやこにいて」
「12・ウ」たゞ

んとてこゝにきたられる時にさま／＼ものかたりの

つひにて

・わかこゝろいへはかすなりおもはなむよしおもひてもたへてし

のはん

・たえかたきおもひをたちてわかるなりきみかこゝろのたひなれ

はこそ

・たひらかにかへりませといのるにもわかいのちさへかつおも

ふかな

さてかの日になりければふたまたせといふところまで

おくりにとていまいづみよりかれこれつらたちて行

道にて田中なにかしかいへに翁をゐて行ければした

かひ行もありおのれら二人三人さきたちてちよのま

つはらのうらてなる松陰に行てまちゐたるほとまさ

ごにかいつけたりける」
「13・オ」

・みやこより君かへり来とまつばらにかくてありなはいかに

たのし

うれしき

いとおそく來たられけるをかしこにおぐりゆく道にて

けふはこのさとにやとりて人々と月見んなといはれ

ければたれも／＼さもといひてかしこのかはらにて

さけなどとふへけるうちあまりにはしたなきやとり

なればいまよりさゝくりのさとまでゆき給へなど

そゝのかしてしひてわかるゝとて

128 きみとわかうみ山とほくへたつとも月はかたみに見るへかりけ

り

はつかばかりまでいひつかのさとにありて舟てせんと
ていてたゞれけるにそのころ風いとはけしう吹ける

「^マ13・ウ」にかしこに文をつかはすとてかいつけゝ
る

こよひ吹く野分をきみかおしはかり舟ていそかて待しうれしさ

(△此印おくにあり かきつゝるへし)

谷川もとゝきかすゝりと源氏ものがたとうるよしきゝ
たりければもとめんといひつかはしたるにすゝはう

らぬよしものかたりのみいとたかくうらんといひお

こせければこゝもあるものなればきぬなとうり
てなどいひつかはす時にすゝりなくてはなどかいつ
けて

(を)

・さむしとて身にもきられぬすゝりいしなからきぬひとへにもか

へんとそおもふ

(かぶるすゝりいしかな)

あききむくやゝなりゆくを老の身のきぬにもいしをかぶるはか
なさ

うたあはせにて いますこしのうたよみかへたる

(のちもかはらぬときはならまし)

・むかしよりよをうしてふそいまよりの猶よろつよにかはらさる
らめ

131

132

(けり)

・吹きかはすあさの夕風さたまらてかやりのけふり立まとひぬる

△すてしおやすてられしこのいかならんともにすみてもすみかた
すて子をよめるうたに

きよに

とよみはへりしをともにすみてはすみかたき世にと御
なおしありしはいかにきこえ侍らんもとはもろとも
にすみてさへすみかたきよにこをすてしおやすてら
れし子わかれ／＼ていかなならんといふ心になん

△よの中のゆめもさまさてたれもみなつひのねふりとなるそかな

しき
(一 一二今すこし)

とありてかけきかうたに似たるものから
さめぬふりとなるそかなしき

又

つひのねふりはさむる也けり

と「うたには出入あり さむる也けりの」(14・ウ)

きはべらず

130

かたいかが　きゝわけ侍らん

くちはのをかしげなるありければかいつけゝる

九月のはしめつかたゆめのうちにてゆめのうたをよめる
・うつゝにもゆめにもましるゆめなれやうつゝとおもへはゆめと
さめつる

とよむとおぼえてさめける時に

137
・ゆめのうちにゆめ見てよみしゆめのうたおもふいまさへうつゝ
けもなし

雨いたくふるひに谷山何かしかはしめてきたりて春の
花あきの紅葉になどおもひしをなとよみける時に

138
花につけ月につけてもかちし人きませはあきのあまそゝきして
はつあきのうたあはせに

139
・おもふ人まちえしはかりうれしともかなしくも吹あきのはつか
ぜ

(15・オ)

すて子をよめる

(前二有)

140
△すつるおやすてらるゝこはいかなれやともにすみてはすみかた
きより

十月すゑつかたまでもあしやのさとに翁のやとられけ
るよしきゝていひつかはしける

141
・なにはちにゆくともゆかぬかりふしはよしやあしやとおもひこ
そやれ

もみちのぢりたるをつかはすとてひろげる中になしの

」
<15・ウ>

猶おほつかなきたよりに文つかはすとて

144 143
・おほつかなたちわかれても百日へぬちへの波路をわたりしや君
きみをのみつねにまちうる山人のことしはさらぬ冬こもりして
さ月はかりにむさしのゆにものしける時天拝山のやし
ろにまふてんとて内田ぬしかさそひければいさとて
かれこれものしていく見ればとくゆきてかけもなく
さてかしこにいたりたちぬれとあらさりければ

145
いさといふをあといふうちに老らくのおくるゝことも山ちのみ
かは

ちりはくをのこにかゝる人や見つらんなどとへとおし
なりければ

146
たまさかに人け見いてゝものとへはこたへたにせぬ山のくちな
し」
<16・オ>

かと田うゝるころなへをさと人のおこせけるをいさこ
の君をつかはすとて

147
さと人のいはひおこせしちまちたのさなへとりわき君にこそや
れ

言翁のたしろといふところになかくやとりてかへられ

もみちはの中にもあしのくちはかな心なしとは見えぬいろして

たれか見るへき

142

さりけるころ

148 きみをまつひかすはかりにくはよりしさ月もかひの無ことしか
な

おなしとしなにはにゆかれるに冬梅のさきいてらる
かいつのとしよりもおそかりければ花につけてつかは
しける

149 いつよりもおくれてさけるうめのはなきみか見えこぬ冬としる
まで

150 みやこへのはなのときにはおくるともかひなくは見しるほど
のうめ」
「16・ウ

秋の末冬のはしめのうたあはせを翁につかはしける中
に

151 あさな／＼おとろくはかりつゆしもにおきやつれゆくもくさ
の花

152 ○・山風にすゝきあきはき女郎花みたるゝのへや花のさねとこ

153 ○・もみちせぬこたちにあたるかけまでもうすいろつきて見ゆるあ
きのひ

154 ・のこりなくあきのひかすもすきか枝にきえのこりたる月はかり
して

155 ④・うみとほくわたりきなからしはしたに羽ねもやすめずするか
りかね

156 ○・このまもる月のひかりもおのつからよわけに見えてちるもみち
かな

157 ○・うつゝにはうつゝありともおもほえすゆめにはゆめを見ると見
つる

ながら

158 よのまよりあきはくれゆくものならんまつよわりきぬまつむし
のこゑ

159 ○・月のゆくみちをひらきてかたよりにあつまるくもはこゝろあり
けり

160 ○・しもこほる松にはたゞくあさからすつゝしりなきもくちこはけ
なる

161 くみわけてむすふひまにもまし水をわかものかほにふたくもみ
ちは

162 神無月たてはしくれもふるとてかかさゝしいつるあさひかけか
な

右十三首歌合
「17・ウ

163 翁の文に大坂は霜いたぐたえかたしなとありけるかへ
りことに

164 しもふれはかなならす雨のふるさとはさむさのとむるひまもあり
けり

さちえ子かいへりやとりで

165 さしむかひなかきよひとよかたりてもあくよなけなるきみかや
と哉

ある人のもとにやとりけるよいとさむかりけるにふす
まなとうすけなりければあるしのきたるきぬなどぬ
きてさせけるよあめのふりければまたのあしたよみ
てつかはしける

166 ○・こゝろさしかさねしきぬのかりふしにさむき雨よものとけかり

はのいたみけるこころうたあはせのうた

とくおこせなどいひおこしける人にわらわすとて
かつおつる老のかたはのいたつきにそやといふたにものうかり

けり」
「18・オ」

古今集のはるのうたとも見るうちに水入にさしたりし
文にうめのかほりければ

むかし人めでし心をさたかにもしらせてかほるうめのはつはな

としのうちにうくひすなくをきゝて

またきゝつはるのしるしに鶯のとしもあくるをまたぬはつこゑ

人はみな冬のまはなるとしのうちにはるしりそめてうくひすの

なく

はなち鶯

なれくくでまとにけちかき鶯はおのつからなるはなちとりかな
」
「18・ウ」

白紙
「19・オ」

しふかき

かきのみのしふきほとにもならすしてなれるとのみもおもふは
かなさ

山田

たゞひとりゆく人見えてなかくにさひしさまさるあきのを山

くつはな

たかむらのかなたこなたをまとひきてまつかえにたにさけるく
すはな

こなるものにつまにせんとちきりける人のをさなくて

みまかりて二十五年のとふらぶ時かの母のもとにつか

はしける

女郎花はなにもはなのさきそひてあらましかはとおもふあき

かな
「19・ウ」

そま

故郷月

何事もたらぬくのなけきのみこりつるそまとなれる世中
八重むぐらまへにまとへるふるさとのはたゐにすめるはつあき
の月

きく

あまりにも花をかさねてきくのはななさけなきまでたわみぬる
哉
なかつきのこゝのかさねにさきにけりあめにたわめるしらきく
の花

もみち

人めには中くはちぬやれきぬもぐらへくるしきやとのもみち
は

172

171

170

169

168

167

173

179

178

176

175

174

173

うつみひ

180 ○・さむきひのゆふくれかたにかへりきてうれしやのこるいほのう
つみひ
」
「20・オ

冬よ

・冬のよのさふさゆるへてふる雨は老たるおのかいのちなりけり
風のやとり

181

182
・はまかせのやとりのまつにさわかしき心さへのやときはなるら
ん

枯木

183
立かれのうめよりおちに生いてゝ花さくへくもわかゝへるなり
おきな

184
おきなとちあひ見るたひにくりかへしいくたひおなしむかしか
たるそ

醜婦

185
・山の井のそこにうつせときよからぬわかおもかけはあらふかひ
なし

書」
「20・ウ

(その) (も) (ゆはかり)

186
・いにしへの文にしるせる人のなにおもかけをさへ見るこゝちし
て

九月十八日にれいの日までかれこれこよなといひにこ
らしたりけるにこさりければとひつかはしゝに
やまさとのときもみちはにみやこひと心おくれてまたしとやこ

187
・や
ぬ

かれこれもみち見るにとてきたりける時

188
・うちむれてけふよりぞ見る紅葉のいまいくたひか人をつとへむ
もとゝきかこむといひてはらく」さりけるころもみ
ちを一葉かみにつゝみて

189
・たゞひとは見ておるやおらすや
もとゝき

190
・すくなきになれぬる人も紅葉を
」
「21・オ

191
・おやをおもふ人のこゝろをくみわけてやるまし水はことにすみ
けり

192
六国か安政四年みやこにありける時かしこの人々のう
たともおこしける時にいひつかはしける

・うすくこくられるみやこのもみぢばをきみひろはずはひなにみ
ましや

とのゝみ寮にさきけるりようりきくといふ花をみてつ
からませ給ひしとてある人よみおこしければ

193
・みてつからつませる花ときくからに世にたくひなきかこそにほ
へれ

十月六日に貞子の君かみまかりけるよしきゝて手向の
花ともゝとめけるにかれたるいときく柳草などい
さゝかをりて

194
・をる花もなき冬かれのくさはらにきみかくれぬときくそかなし
き

冬日

195 ○・冬の日のまどろみつるふまつかけのかはるすかたのおもしろき

か
な

冬月

196
上 てらすひはさらにもいはず月影のおほろなるさへはるかとも見
「22：オ」

一〇

冬夕用

・まとのとのやれまもわきてたゞみにもおくことうつるしものゆ

六月

十二月次合二

・おくしものあさしふかしをねながらこしるのみとしをへしる

三

199
・はなれいそのいはねをたゞく波のおとをきかぬまもなきしまか

けの

11

・夕さればはなちかひなるうしのこもおのかふしとにかくへりてそ

ぬ
る

2

中
二

11

14

七
五

23

二三才

白紙一
卷之二

213	○・夏のゝをかなたこなたになかれたる川すちことにとふほたるか な	なはて	ねむのき	はら	ゆふけたくみなどの舟のけふりにもうかふはかりに見ゆるまつ ねかな	ゆふけたくみなどの舟のけふりにもうかふはかりに見ゆるまつ ねかな	ほたるとふかけもすゝしき山川をゆひへたてたるさとのしはか き	ほたる	夏のうた まへに入をこゝに
212	・をちかたのむきふの中に行かひの人の見ゆるやなはてなるらし 鶯居 ほたる	なはて	ねむのき	はら	ゆふけたくみなどの舟のけふりにもうかふはかりに見ゆるまつ ねかな	ゆふけたくみなどの舟のけふりにもうかふはかりに見ゆるまつ ねかな	ほたるとふかけもすゝしき山川をゆひへたてたるさとのしはか き	ほたる	夏のうた まへに入をこゝに
211	・こきいてゝ舟より見ればはこさきの鳥居も波にたつはかりして	鶯居	ねむのき	はら	ゆふけたくみなどの舟のけふりにもうかふはかりに見ゆるまつ ねかな	ゆふけたくみなどの舟のけふりにもうかふはかりに見ゆるまつ ねかな	ほたるとふかけもすゝしき山川をゆひへたてたるさとのしはか き	ほたる	夏のうた まへに入をこゝに
210	209	208	207	206	205	204	203	202	201

214 · こかくれにはてぬる月をいつこよりうつしと/orたるにはの池水

かはらけ

215 · かはらけのわれにひとしくみち中にさておかれてもとる人そな

き 「(25・オ)

さみたれ

216 · かは水のあふるゝまではやましとかあかぬけしきのさみたれの

そら
こけ

217 · はつかなるやとのこけちもいつしかとやへむくらふになりにけ
るかな
にはとり

かは
れす

218 · あさいするあるしにもにぬにはつとりあかつきおきを夏もわす

ねむのき

219 · つれ／＼と雨ふるひにはねむのきも人にかはらぬ心見えけり
八月十五夜おくりにゆきける人々とゝもに

言道翁にわかれてかへるさに

220 △わかれつゝかへるこゝろはやみなれや月のさかりに道まとふら
む

おなし心に 「(25・ウ)

221 わかるればやかてもきかへりこむとしのはるへそたゝにま
たるゝ

おりにゆきける人こかにきたりてよもすから月見るう
な子

222 · たひにしてきみか見るやことさらにしたしくなりぬあきの月

影

みきのうたともかきて翁のもとにつかはしけるにかへし
とて

言道

223

· わかれつゝたひゆく道のくれゆけはおもひやるやとおもひやり
つゝ

以上

224 白紙 「(26・ウ)

うまのとしのはるのはしめつかたに
きのふまでこほりて見えし川くまのよとより水はぬるひそめけ
り

225 · あめとのみふるやのゝきにおとしつゝ竹になかるゝ春のあわゆ
き
226 · いそきぬる梅にきそはぬあをやきはすかたのまゝのすかたなり
けり
ある時に

227 · いすゝ川わたりはてゝもたゝせへぬかのきしにけて遠さかりな
む

228 つく／＼と心のありかたつぬれはあさしふかしのなかになつさ
ふ
あわゆきのふるすなからにうひすのおやになくねをまねふたに
かけ 「(27・オ)

人のいへのうめかえをれてさかれるを見て
たか心かけたるかきのうめのはなをりさしなからさてもおくら

ん

故郷花

231 ●ともすればまたゆきしものふるさともよにおくれしどきくさく
らかな

寄花

232 ○・物おもふこゝろのくまのめにさへてかすまぬ花もおほるなる哉

前ころ素行知良なとはからすきたりければこのわたりを
こゝかしこありきける時

233 ○・を山田のあなたに花をふりさけてちはらの松のもとゐする哉

散花

234 けしきなくおちなむよりはさくら花吹まく風にちらばかるなむ
」
〔27・ウ〕

235 ・しら波にかくれていはもあらはれてありそゆたかにひける夕し

236 ・いそ山のすかたをうみにゑかくまでさやかにうつすはるのゆふ
なき

237 川舟
238 花さかり
239 春夕

(趣向よし よみがたし今少とありしうた)

240 ○ひたのをにひかるゝはなものかれえぬみかのつとめるよなり
けり」
〔28・オ〕

241 ・さきたらすおくれすぢりて行花はおのつからなるちきりなりけ
り

242 ・まなくこし花のさかりにこきませてよのうきなりそ立まとひぬ
る

243 ・おなしくは花のかけともいはすしてまつに雨よくさとのきこり
め

244 こけむしろ
樵女

245 ・はることにさかゆく花のしたかけはこけのむしろもしきひろめ
てなる

246 夢春
春風

247 ○・はることみしかきものはなかりけりいつれのとしかなかしと
おもひて」
〔28・ウ〕

八重桜
落花

248 な
249 な

夏のはしめつかた
・むかし見しちとせのかはのうかひ舟いまもこゝろにうかひくる
かな

安政五年うまのとし四月十三日に相遠をとふらひける
時けふはこゝにしはしなといひてとゝめければ わ
れもかへりうくおもひなからちゝ君ひとり山におは
しませはとくかへらては待給ふらはたちかきにとい
ひてかへりつるにあくる十四日みまかりければいと
くちをしくて」（29・オ）

250 しはしとてわれをとゝめしおもかけは心にきえぬかたみなりけ
り

251 おやを置て先たつこともせさりしもまかせぬものはいのちなり
けり

ことし幸丸十三なりけるに相遠とわれらおやこになり
そめし時もかれ十二歳なりしかばその時のことさへ
しのひていてられて

252 おやといはれこといひそめしむかしへやいまのうきめのはしめ
なりけん

相遠かいまたやまひしてふしたりけるこゝろひとよをみ
□□にてほとゝぎすのこゑをきゝてともにましはる
ことゝもおもひてられて

（をめでし）

・きみをよふしてのつかひとしらすしてはつねきゝいるやまほ
はるゝかと見えし日影のくらみきてまたふりまさるさみたれの

262 ○・さみたれのはれぬもよしと思ふかなこゝろのまゝにこゝろしつ
めて

五月雨

255 からやまとかしこき文はよの人のこゝろのやみの月日なりけり
かねてよりわかなきあとをたのみでしこのなきからを中々に見
て 書
山彦時鳥

256 257 ○・ほとゝきすまちうるのみやおもふ事たかはすなれるおのか山す
み

ある時に

258 259 260 •わかみをはつかぶる人になせりともこゝろにかなふことなから
まし」（30・オ）
•かとせんとしも月日もしらねともつひのたちひはおもひこそ
やれ
○・こゝろよりうけひくことはなく／＼人のことはにしたかはれ
つゝ

長雨

261 うの花のなかれし雨のなこりよりふりつゝきたるさみたれのそ

ら

雨

谷水

264 ○・なかれゆくさまは見えねと見ゆはかりおとにしらるゝ谷のほそ

水

梅実」〈30・ウ〉

265 •はかくれにさをのうきめをのかれたるうめのこのみもあめにお

ちけり

かはつ

266 •さみたれのを山田おつるみなくちにむせひあひてもなくかはつ

かな

わかたけにあさかほのゝほりたるかく書きたるものにう
たかいつけてよと人のいひければ

267 •枝も葉もまたとゝのはぬわかたけにまとひのほりてさけるあさ
かほ

六月十六日に貞和にめあはすへき人をはるこのゐてきた
られける時に

268 •わかたけにひめこまつさへうゑそへて老の心ものふこよひかな
はるこ

かへしとて

269 •わかたけにならぬこまつの生ききのみとりのいろはきみかまに
く」〈31・オ〉

おなしこゝろを

兄の君

270 •まつたけのつきぬよはひをむすひこめてなかくそたのむきみか
めくみを

この日は久子かくる道にて陶山一巻にあひたりけるに大
マダ

なるうちわをつかはして道のあつきをよぎよといひしと
てもできたりなればすなはちかへすとて (そのうちわ
にかいつけゝる)

271 •あつきひにうつしうへたるひめゆりもきみかあふきのかけに
しほれす

よの中いとわづらはしくおもひける時に

272 •こゝろにはすてしわかみもすてかたき人にそむかん名にそひか
るゝ
むかし言道翁よりあさかほの花をつゝみておこせられし
ことありけるをこのほと見いてゝ大阪にすまれける時つ
かはすとて

273 •こゝろさしふかくとむれはあさかほのはなのいろかにうつささ
りけり」〈31・ウ〉

白紙」〈32・オ〉

秋 三日月を見て

274 まつかけのすきのひまかとたつぬれはうすくもかくれ見ゆる三
日月

275 •おほかたは見てやあるへきはつあきのにほひそめたる三日月の
かけ

夏行路雨

276 •ぶりやめはもとのあつさにかへりけりあめのうちにぞ道はゆき
なむ

277 •あき風は川のそこにもかよふらしすゞしく見ゆるみづのなひき
藻

も

あさ顔

278 • わかたけにまとひのほりてありあけの月のおもにもさけるあさ

かほ

279 • おとろふるおのかしたはもかへり見ずさきまとひゆくあさかほ
の花」<32・ウ>

水月

280 • まつからのはゆのひかりも見ゆるまでかけ水底にうつる月哉

蚊遣

281 • 山さとのかやりのけふりたちかてにたな引こむるあきの夕きり

出月

282 • あかつきの一むらあかきくもまよりしらけていつるありあけの

月

283 • むらさめのくもに立そふゆふにしも中たえ／＼にはるゝそらか

な

きり

284 • 山さとのあさけの畠立こめて霧のみふかき野へのはつあき

」<33・オ>

ある時に

285 • すきてこしかたをおもへはいくたひかあやうきせをもこえしな

るらん

アメリカエンキリ火などの舟こゝかしこに来りてよの
中さわかしかりけるころ七月十日ばかりより八月も
ちはかりまで雨風いたくはけしかりければ

286 • おそひ一むごとくに舟をよせしとてあめの神風立さわくらし

287 柳

かな

月

288 • あき風にさわきたちたるあをやきにすかりにねてもとふこてふ

かの月」<33・ウ>

289 • のきはなる松にかゝれる月かけはてにとるばかりまちかゝりけ

り

290 • わかをかのちもとの松をよなに／＼かへてものほる秋の月影

● (今少しのうた)

291 • さわきたつ松のかはかせあやまちてはちすの花はちるけしき

かな

292 • さめかねて見えしよのまのゆめにたにあきのけしきのにほひ

（今少）
つるかな

● かそふれはいつかいつよのあくるまで吹もたゆまぬあきの山

風

293 • かたよりにうらふきかへすかはやなきしらけてさふきあきの
夕風」<34・オ>

八月十四日の夜馴花亭にて月見ける時くもりければ

294 • ひともねよとやくもるつきかけ
ゆきとし

といひ
いてゝありける時

・なかきよをてらしつかれて中そらに

神代といふ題に

296
・くれたけのすぐなるかみのみよゝりもよのわさはひのふしはあ

りけり

なは

297
なひこめしなはもいつしかすゝたれでこゝろななくも見ゆる山す

ひと

人

298
・すてかてにわれをとひくるよの人のなさけもうけくなれる山す

み

すたれによする

述懐

300
・よわたりはすたれのいとのうらうへにゆきちかひてもおなしす

ちなる

はつかり」
—
〈34・ウ〉

301
あまくもりほしたにみえぬゆふやみにうちむれてくるはつかりのこゑ

夕日

302
そらとほくなかめやられて夕つゝのかけたにあきはさひしかりけり

山家

303
・山ふかきそまのやとりはひをたきてよるのふすまもなしとこそ

きけ

あさかほ

304
・かとのともひらかぬやとのなかゝきにねさめかほなるあさかほ

の花

あるしもわかみもこゝちつねならすしてすくしけるあき

の宵に

305
かきひとへあなたのゝへにいてもせてやとをかきりのあきはきのはな

ときはの山

306
・ときはやまいろにいてねとおのつからさひしきあきはのかれさ

307
りけり
—
〈35・オ〉

いそのまつ

308
・はなれそのいはねのまつは遠かたのしま山あらしたねやまきけ

ん

世

309
・よひ／＼の月のもりくるまつのまにかならずかくと見ゆるくものい

月

310
・ゆたかなるをたのなかなるひとつやもかたへは月のかけくらく

のい

して

311
・けふのまとおもひしことをなしをへてむかへは月も山をいてき

ぬ

312
・秋の山のほるわかみをしたひきてくたりゆくさへおくる月影

・浦まくにさしかはしたるえた見えて月おもしろきこかくれのい

ほ
—
〈35・ウ〉

・とよどしのあきたのほたちさやかにもてらしみちたる中そらの

月

- | | |
|--------|---|
| 315 | 十五夜雨いたくふりければ
・かひもなき月のさかりのこよひかな人さへいへに雨こもりして
むし |
| 316 | さなからにそれとはきげとまたしくてこゑもつゝかぬにはのま
かな
つむし |
| 317 | ○・ありあけの月見るからにさゝぬともきりにふたかるあさほらけ
あさほらけ |
| 318 | 丁といふできものをよにあまたわづらひけるころかの
やまひをして |
| 319 | ・おほかたはおくれかちなるやま人もうきてふよには生れさりけ
り |
| 320 | あきの田をよめる長うたならひにかへしうた」<36・
オ> |
| 321 | ・山見れば谷のくま／＼み見れば波よるきしにあきの田のほ波
うちあひてとよとしのほにあらはるゝとよとしのいね
かへしうた
ある時身といふ題に
かへしうた |
| 322 | ・おく山の谷のくま／＼うちいてゝ波よるきはみに立ほなみ哉
りけり |
| 323 | 人心 |
| 324 | あきふかき山のかけなるすゝむしはひるさへもなくものとなり
紅葉 |
| 325 | ・けふ一日ふかれていろにいてにけり風のそめたるあきのもみち
は |
| 326 | きのふまでかそふはかりにうかひたる池の水鳥けさはいくらそ
水鳥 |
| 327 | ・きくのはななかきさかりを見はてゝもあかぬこゝろはうつろは
なくに |
| 328 | 庭月」<37・オ>
影 |
| 329 | ・あきふかみちれるこのはのかす／＼にしくれてやどるにはの月
暮秋 |
| 330 | ・そめあへぬおのか紅葉もおきなからけふをかきりのあきのゆふ
かり
りかね |
| 331 | ・おのかとちおもふまゝにもかたるらんこゑむつましくわたるか
ころまで猶人たかりなりしかは |
| かな | 日ことにたけかりのつひてに人のとふらひけるころ |
| （36・ウ） | |

冬木の梅」
（37・ウ）

のはな

待人もなけなるをやのゝきはにはとくもさくへく見ゆるうめか
な

あるあしたに

・よをなかみたきつくしける樵女のあさな／＼にそまかよひする
まきのと

333 334
・せくこともあきはなかりしまきのとをひるさへあけぬ冬となり
にき

かれをはな

335 336
・ゆふつくよ冬の嵐もたえはてゝひもありけるかれをはなかな
ぬるてのもみち

336 337
・冬かれのこすゑにましる紅葉はあきにおくれしあるしなりけり
」
からす

337 338
・もとかしくなくかときけはつゝましくゑくちからきむらから
す哉

338 339
・冬日のいそくまに／＼いそかれて遠き道をもはやくにけり
小春

339 340
かみな月ひるははるにも似たれどもくれゆくまゝにしもの
よあらし

340 341
・みしかきもいまやかきりといひ／＼て猶みしかくもなれる冬日
かうたに

341 342
・おくしもにかるゝしたはもしらしかしまたいろふかきかうたに
な

（ろ）

」
（38・ウ）

・にきはへるさとのようすのおとたゆみわれもつかれてまとまれ
つゝ

冬桐

343 344
きりのはゝとくおちはてゝ寒夜にやとりなけなるありあけの月
冬松風

・もうともに老ぬる松もすむ人も冬のよかせはさけふはかりそ
きつね

344 345
月さふき冬のゝきつねなくこゑをさそひかほなるしものよあら
し

345 346
しはすはかりにわづらひてねたりけるころゆきのふりける
を

346 347
・しはしたにまくらはなたてふせる身もおきたつはかりふれるし
らゆき」
わづらへるわかみふせやのまとのとをひろくませけに見たるゆ
きかな

347 348
しはらく素行ぬしかこされければいかてなどいひつか
しける

あくるひきたりて

348 349
やみふせるきみをはいかてよそに見んかなたこなたもうたの
ちゝはゝ

かへし

素行

341 340
よそに見ぬきみかこゝろを見るまゝにこをまつはかりまたぬ日

もなし

やまひおこたりかたになりてこのほとあさからさりしこゝ
ろつくしなとけいしける時こたひはおほつかなくこのみす
くなきこゝちし侍りきなといひければ 素行

350 うかひぬるあわやときみを見しほとは谷のいつみもくみうかり
しに 「(39・ウ)

かへし

351 きえぬへきあわをもきみかそてひちて谷のいつみにせきとゝめ
つる もひやりて

352 いたくなやましかりけるころたひにまします師の君をお
たひにある人をまつまはふみならしつひのかとても立とまりて

む

おなしころ

353 をしからぬいのちとつねにおもひしはやまひになれぬ心なりけ
り

り

あるしの君とゝもにふしてなやましたりければかたみにお
ほつかなくおほえて

354 きみとわかかなたこなたに行とまる道はいつれかいつれるら
ん」<40・オ>

355 あめ風をともなひゆりてよもすからいくたひ人をおとろかすら
十一月二日夜七度はかり地震いたくゆりける時に

む

356 いかならむかたにこのよをゆりかぶるあまつみかみの御わさな
るらん

357 △あめつちのかみのこゝろやさわくらんゆりにゆするあきつし
ま山

(下句今少なるへし)
(上句今少)

358 △をちかたのさとうちめくる時つゝみかすきこゆるやねよとなる
らん

あられ

359 吹おこる松のあらしのちかつくとおもへはやかてふるあられか
な

十一月二十八日は大坂につかはすかへし」<40・ウ>

おきなするかにゆきしよしきゝてそのことをいひつかはすとて

360 ふしのゆきとくみし君はさとにふる□□何をするかにきみなく□

□□□

御うた

361 こと舟もなつめる人もひとりたにはらひつくさむかみかせもかな」<41・オ>

覚え書」<41・ウ>

(いつこより 句ふともなき花のかにてふもよそへる春のゝへか
な)

中村石丸

(花のこゝらうちふせしよりあやめ草ひくゝねながきわかやまひか
な)

(みまかりける時うた)

(花ぬれし) (さのまさる)

364
とらふれはいかまくほしくおもふかなかたありかたきみよにう

まれて こ 〈44・オ〉

覚え書 〈44・ウ〉 く 〈45・オ〉

筑前 筑紫

365
かみかけておもひたちぬるなかたひの猶ゆくすゑをいのるかし

こさ 〈45・ウ〉

白紙 〈46・オ〉

覚え書 〈46・ウ〉 く 〈47・オ〉

白紙 〈47・ウ〉

註

(1)『向陵集』は、望東尼自詠歌約1850首、望東尼以外の歌54首を加える。

また、『みのとしうまのとし』は、末尾の覚え書の中に見せ消ちの判読不明歌を含む歌が数首あるがこれは採らない。

(2)『向陵集』の歌稿のひとつに『木葉日記』がある。これについては、前田淑

氏の「野村望東尼自筆本『木葉日記』」(福岡女学院短期大学紀要第18号

昭和57年)に詳しい。

(3) 拙稿「和歌文学大系 草録集」(明治書院)解説参照。

【付記】

本稿の資料閲覧、および翻刻については、福岡市博物館に御許可を賜つた。ここに深甚の謝意を表する次第である。

(しんとう やすこ・九州大学大学院博士後期課程)